

編集後記にかえて

明治時代の日本人は立派だった、と巷間よくいわれる。だがすくなくも、「信用」という面に関しては、どうもそうでもなかったらしい。というのは、当時の新聞を見てみると、日本人、とくに日本の商人は信用がならないというのが主たる論調だったからである。

『報知新聞』を府下一の新聞に押し立てたのは、村井弦斎の連載小説「日の出島」であった。村井はその教養小説の中にいろんな架空の発明品を登場させるが、その一つとして「人道同盟会」という架空の信用構築のための組織を設立させている。これで海外に通用する信用を構築しようというのだ。小説の主人公に言わせれば、明治30年代の悪人は善人のふりをして信用をかちとり、人を欺く。それゆえこれを見破る人道同盟会が必要だというのである（『報知』1901. 2. 20）。急速な市場社会の広がりの中で、これまでとは異なる信用システムの構築が叫ばれたのである。

だが、そうした時代の要請にもかかわらず、その後日本の信用が急速に進展したという話は聞かない。欧羅巴大戦の物資不足に乗じて日本船が石の詰まった缶詰を届けたというのが、事実かどうかはわからないが、こうしたうわさがあったのは事実である。そして、信用とはうわさのようなものである。少なくともメディア論的に言えば、うわさはマスメディア普及以前の最古の情報メディアであり、現在の社会でもその信用的な効力を一定程度もっているといえるだろう。だから、日本のパスポートには信用があるというのがうわさだとしても、それが信用の一端であり、その背後に日本の経済力があるということは言えそうである。

もちろん戦前の日本に信用が存在していなかったわけではないだろうし、たとえば、明治30年代以降の信用調査会社の成長や金融に伴う信用システムが成長してきたはずである。しかし、明治から現在の日本の信用の懸隔を埋めた経緯についてはまだ十分に説明されていないように思われる。

大森晋氏の著者翻訳「The Kyoto Textile Industry's Product Management Tool」は、これまで分業として捉えられてきた西陣織産業を、悉皆屋という存在を軸に、日本の信用システムの特長あり方として理解したものである。これを日本の近代信用史にどのように位置付けるべきなのか。興味深い問題だと思う。

近代における信用の再構築はグローバル化の一形態であるが、金基淑氏の「テレビ番組からみる「多文化家族」の葛藤と相互理解—韓国 EBS の『多文化姑婦列伝』を事例に—」は、日本より格段にグローバル化が進展した隣国韓国の姿を、外国人嫁と韓国人姑のバトルを描いたノンフィクション番組の分析を通じて検討したものである。直近の年間婚姻数のおよそ1割が国際結婚であるという数値にまず驚かされるが、それ以上に、この番組がすでに7年以上300話に及んでいるということが、多文化家庭の身近さとこの問題が抱える難しさを示しているだろう。詳しい分析は論文を参照してもらいたいが、そこには異文化による齟齬ばかりでなく、高齢の姑と孫娘のような外国人嫁との世代間ギャップやジェンダー意識のズレといったものも

あり、外国人嫁の適応の困難さと姑のいらだちを充進させている。だが、この番組の面白いのは、後半の第二部で姑と嫁が嫁の母国を訪れ、異文化体験をするという段が仕組まれており、それが両者の一種の理解の契機となることである。これは一種の教育効果を狙った番組作りなのだろう。それほど重要な政策課題になっているといえるかもしれない。いずれにしろ、少子高齢化の解決手段として国際結婚が進められている以上、適応のみを強制するのではなく、国民の多くに多文化化の必要を理解してもらう必要があるはずである。

少子高齢化という同様の状況にある我が国においても、国際結婚の奨励はその解決策の一つとして早晚選択肢の一つとしてあがってくるだろう。私たちにとっても、学ぶべきことは多いはずである。

(Y・K)

執筆者紹介(掲載順)

金 基 淑	京都文教大学総合社会学部・教授
大 森 晋	京都文教大学総合社会学部・非常勤講師

2020年度 編集委員会

*小林康正 平塚 力

*編集委員長

京都文教大学 総合社会学部研究報告 第二十二集

令和3年3月31日 発行

発行 京 都 文 教 大 学
〒611-0041 京都府宇治市槇島町千足80
電話 (0774) 25-2400

印刷 (株) 図書同朋舎
〒604-8457 京都市中京区西ノ京馬代町6-16
電話 (075) 205-5506